
俺の幼馴染は変わり果てていた イナズマイレブンGO

サラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の幼馴染は変わり果てていた イナズマイレブンGO

【Nコード】

N8609X

【作者名】

サラ

【あらすじ】

主人公・足立沙羅は、幼馴染の相川涼輔とともに雷門中に転校してきた中2のサッカー大好き少女。

サッカー部に入部するが、なんと次の日から一週間合宿に行くことになって……！？

たまーに、というかほとんどギャグっぽいと思います。

シリアスなんて……！ よほど重いときムードの時しか書けないぜ……。

都合上、南沢先輩が雷門にいます。

ギャグっぽいけどいちおう恋愛っぽくしたいなあ……とか。
サッカーしてることかほとんど無いよ！

全然原作のストーリーとは関係ないです。

オリジナルキャラが出てくるのは……もう分かってるか。うん。

まあ、そんな感じのラブコメディです。

プロローグ：風（前書き）

どーも、恋愛小説とか書けるわけねえと思ってたのに書きちゃった
サラです。

とりあえずどっぞ見てってください。

プロローグ：風

「へ、ここが雷門中か」

アタシは校舎を見上げていった。

アタシの名前は足立沙羅^{あだちさわ}。

水色のショートヘアで、顔つきは男っぽいとよく言われる。

そのせいで、制服を着て登校しようとしてるだけで警察に捕まりそうになるほどだ。

「楽しみだね、沙羅」

アタシの隣でこう言った少年は相川涼輔^{あいかわりょうすけ}という。

きれいな金髪とメガネが、太陽の光を反射してきらきらと光っている。

いざ踏み出そうとしたとき、後ろから大きな声が聞こえてきた。

「うわあああああああ、ぶつかるうつつうつつうつつ!!」

「「は？」

ドッサーン!!

叫びながら走ってきた少年と思いつきりぶつかった。転校初日からこんな不幸続きで、大丈夫だろうか、少し不安になってくる。

不幸とは、まず登校中に電柱に真正面からぶつかったり、途中で警察に捕まりかけ、その上逃げ回っているうちに道に迷った。

これはたぶん、アタシが星座占い・血液型占いのどちらも最下位だったからだろう。

「ふわあ! びっくりした……って、大丈夫ですか!？」

茶色の天然パーマのような髪に灰色の目。

なんか、どこかで見た覚えが……。

アタシはそんなことを考えた。

ぶつかってきた少年は、まず飛び起き、こちらに声をかけてきた。

大丈夫、とアタシが返事をする、少年はほっとしたように胸をなでおろした。

彼はさっと立ち上がってから、二人の顔を見つめ、こう言った。

「もしかして、貴方たちって足立沙羅さんと相川涼輔さんですか？」

何で名前を……？

当然の疑問を抱く。

「何で俺たちの名前を知ってるんだ？」

気持ちを代弁するかのように涼輔が言う。

「覚えて無いんですか？俺です、松風天馬です……！」

松風天馬。

そっいえば……

「あ、こないだ河川敷で練習してた……」

「そうです！そのときボールを沙羅さんに拾ってもらって」

涼輔も納得がいったようだった。

「ところで天馬。お前、なんか急いでたみたいだったけど……」

そう涼輔に言われ、はっとしたように天馬が言う。

「やばい！俺、サッカー部の朝練行かなきゃ！じゃあ沙羅さん、

涼輔さんまた後で！」

すると天馬は風のように走り去っていった。

「松風天馬……。アイツ、雷門中に風、いや嵐を呼びそう……」

アタシは天馬の後姿を見送りながらそっと呟いた。

プロローグ：風（後書き）

……プロローグだからって短い気がするのは私だけだろうか。

天馬「んなことないし。それより作者は調子に乗りやすいからいいところより悪いところバンバン言ってね」

ありがとーございました〜つづきも待っててください〜。

天馬「誰も待ってる奴なんていないと思うよ」

1話・転入生。(前書き)

一日で一話書けるんだったら、すぐ完結しそうだな。
とりあえずどっぞぞ。

1話：転入生。

「はあ、疲れた」

俺は教室の机に突っ伏した。

「おいおい神童。お前それでもサッカー部のキャプテンかよ」

そう呆れたようにいうのは、親友の霧野蘭丸。

あ、そうそう。俺の名前は神童拓人。

さっき言われてたように、雷門中サッカー部のキャプテン。

「分かってるさ。でも、昨日は眠れなかったんだ。そっとして
くれよ」

そう答えると彼はさらに呆れたようだった。

「まあいいけどよ。あ、そういえばさ、さっき職員室前通ったら、
担任と一緒に男みたいな女子がいたぜ」

何だそれは。

あ、これじゃ失礼か。

何だそいつは。

俺は、自分でも壊れて行っている気がしてきた。

「俺が思うに、転校生だと思っただ。担任と一緒に居たんだから、
たぶんうちのクラスだぜ」

「ふーん？」

俺はあいまいな返事をした。

まあ、どうってことないし。

俺がまた机にうつぶせようと手を伸ばすと、蘭丸はちょっと意地悪
く笑んだ。

「たぶん、お前にとって刺激的な奴だと思っぜ」

「……？」

どういう意味だろうかと考えながらも、俺は机にうつぶせた。

その途端担任が教室のドアをあけ入ってきた。
くそっ、寝ようと思ったのに。

担任の隣には、どこかで見かけたような少女がいた。

制服じゃ無かったら、”少年”と言っても違和感は無かっただろう。

「えー。今日は転入生がこのクラスに来る。……って、言っていたか？」

『聞いてません』

クラス全員が息をそろえて言う。

俺は言わなかったけど。

そんな様子を見て、少年のような少女はクスクス笑う。

なんだ。笑うと女の子みたいじゃん。

「そうか。まあいいだろう。その転校生って言うのがこいつ、足立沙羅だ」

そう説明されると、沙羅と呼ばれた少女はニコツと笑った。

「はじめまして、足立沙羅です。趣味はサッカーと歌うことです。よろしくお願いします!」

沙羅と呼ばれた少女は、微笑みながら、年相応の元気さで言った。
なんだ。声は以外に女の子っぽいじゃん。

「よし、席は……神童の隣な。まあ、空いてる席なんてひとつしかないけど」

沙羅は俺の隣の空いてる席に座る。

きれいな薄水色のショートヘア、きりつとした瞳。

なんか、見方を変えれば美少女だな。

「よろしくね。たっくん」

「なっ……!」

沙羅は、こちらを振り返って言った。

『たっくん』なんて、親にも呼ばれたこと無いぞ!!
て、というか何で俺の下の名前知ってたんだよ!!

まあ、サッカー好きなら知っておかしくも無いけど。

けど……けど……なんでそんなに馴れ馴れしいんだよ!!

「くくつ。やっぱりたっくん変わんないね」
笑う沙羅。

「ほら、俺の言ってたこと当たったろ。お前にとって刺激的な奴だ
つて」

後ろから蘭丸が囁いてくる。

なんかイラツとした。

後で殴つてもいいかな。親友だけど。

「蘭丸お前」

「そこうるさい。授業始めるぞ」

「はーい」

蘭丸と沙羅がとぼけたように返事をした。

それが俺と沙羅との2度目の出会いだった。

場所は変わって、3年教室。

あーあ。嫌な奴と隣になっちゃった。

俺は相川涼輔。

まあ、雷門中に転入してきたけど、一番嫌な奴と隣になってしまっ
た。

嫌な奴つてのは、南沢篤士。

あれ？ 下の名前の『し』ってさ、あれで良いんだっけ？

そもそも『あつし』だったっけ？
まあいいや。

「よくねえよ」

あらっ？ 心の声聞こえてた？
まあいつか。

そんなことより。

「おい南沢。四六時中睨みつけてるようなことはすんなよ」

「ふん。その申し出、丁重にお断りさせていただく」

くっそ、あの態度が気に入んねえんだよ！！

「ところでお前、部活やっぱサッカーやんのか？」

「当たり前だ。沙羅が入るって言ったし、俺も入りたいし。何しろお前をからかえるしな」

「ふん。俺もお前のアホ面見てるの楽しいから、まあいいか」

「何だどこのナルシスト野郎」

「そつちこそロリコンの癖に」

あ、イラッとした。

ロリッ！ ロリコンとか……べっ！ 別にそんなんじゃ………
おっほん。

危うくツンデレっぽくなるところだった。

「このメガネ野郎！」

「キザったらしい女たらし！」

俺と南沢の視線に物理的な力があつたら、火花が散っていたであろう。

「おい南沢と相川！ 授業中にケンカはやめろ！！」

先生にそう注意されたからには、続けるわけにはいかなかった。

まあ、今やっているところなんて、前の学校ではとくに習ったところだったので、特にすることも無かったが。

「この決着は後でつけてやる……」

南沢が独り言のように呟いたそれを、俺は聞き逃さなかった。

まあ、そんなことより俺が何で南沢を嫌っているか説明するか。

それは、今から5年前のこと。

俺と沙羅が公園でボールを蹴って遊んでいた。

と、そこに女子に囲まれてるリア充……つまり南沢がいたわけよ。
うん。

まあ、最初っから知ってたけどよ。南沢のこと。

南沢は女子を全部……じゃ無かった。

全員追っ払ってから俺らの方に来た。

何しにきたのかと思ったら、いきなり沙羅の体を抱きしめるじゃないか！！

沙羅、ワケが分からず気絶。

俺、超激怒。

南沢、腹を抱えて笑い出す。

笑い出す南沢を見て、俺の怒りゲージは満タン。

思わず殴りかかった。

それを見てた女子から悲鳴が上がった。

「いやああ！ 南沢君があ！」とか、「きゃあああ！！」とかさ。

うん、よく考えるとあいつら、このクラスの女子じゃん。

まあいつかそんなこと。

南沢はよけようともせず俺の拳に当たり後ろへ飛ぶ。

そしたら、動かなくなっただんで様子を見に近づいた。

そしたら顔をパンチされた。

くっそ、今思い出しただけでも腹が立つ！！

パンチを喰らった俺を見てアイツは一言。

「人を騙すことも、実力のうちだよ。メガネ君」

そのままあいつは去っていった。

あー、今思い出したのがいけなかった。
無性に殴りたくなってきた。

あーイライラする。

イライラする。(大事なことなので2回言いました)
ふと隣を振り向くと南沢は眠っていた。
うわっ、こいつ……。

起こしてやるうと一発殴る。

「いたっ！」

そう小さく言い、目を覚ます南沢。

ざまあみたか。

「お前……」

あ、完全に怒りスイッチ入ってるな。

まあほっところ。

「相川のばっきゃろおおおおお!!」

その声と同時に、今日の全ての授業の終わりを示す鐘がなった。

よし、帰るか。

1話：転入生。（後書き）

はい。神童・蘭丸・南沢の三人、キャラ崩壊してます（＾o＾）
絶対南沢叫んだりしませんよね。

蘭丸もそんな意地悪そうじゃないし。

神童はもうだめだ。

気品が感じられなくなってる。

まあいいや。（よくねえ

感想とかくれたら、部屋中踊って回ります。（迷惑だ。

それでは近いうちに会えることを祈りつつ。

2話・異様な入部希望者（前書き）

今回も（？）シリアス場面は見られません。
ギャグだらけですがどうぞ。

2話：異様な入部希望者

キーンコーンカーンコーンと、今日の授業全てが終わる鐘の音と同時に、南沢先輩の、

「相川のばっきゃるおおおおお!!」

という声が聞こえたのは気のせいだろうか。

隣の沙羅にも聞こえたらしく、彼女も少し困惑気味だった。

「ねえ、今の叫び声聞こえた？」

「うん。南沢先輩の声だった」

「なんかどっかで聞いたことある気がする……。とりあえず、相川って言うのはアタシの兄さんみたいな人の事だよ。きつと」

「誰だよそれ」

俺が聞くと、蘭丸が呆れたように言い返す。

「お前、そっちも忘れたのかよ。沙羅といつも一緒にいる、お兄さんみたいな人だよ。相川涼輔って人」

「ふーん」

まあ良い。そんなことより、俺は聞いてみたいことがあった。

「沙羅って部活何入るんだ？」

そんなことかとか言うな。

「え？ もちろんサッカー部に決まってるだろ！」

沙羅はカバンを肩にかけながら返事をする。

そうやってかけるんだ、カバン。

たまーに、女の子らしいところあるんだな。

最後の『だろ』で台無しだけどね。

「ふーん。ていうか決まってるないし」

「アタシの中じゃ決まってるの!!」

「あー、ハイハイ分かったよ」

そう答えると沙羅は満足したようだった。

「分かればいいんだ。それより早く部屋連れてってよ！」
急かす沙羅。

腕を掴んで振り回すんじゃない。
痛いだろ。

それを見た蘭丸が、クスツと笑う。

「それじゃあ行くか」

「本当!？」

その時沙羅が腕を放して突き飛ばしたために、俺はイスから転げ落ちた。

くっそう。

「やったあ！ 早く行こうたつくん！」

あーもうその呼び方やめるとか思ったけどまあいいや。

「分かったよ」

そうして俺ら三人は、沙羅に腕を組まされ廊下に出た。

「久しぶりだな、お前ら。沙羅、俺のこと忘れてなかったか？」

そのすぐ後、上から声が降ってきた。

声の主のほうに顔を向けると、そこにはメガネをかけている金髪の上級生が立っていた。

上級生かは知らんけど。

勘だよ、勘。

まあ、背が高いからってというのが理由なんだけど。

「涼輔！ 忘れてないよ!!」

沙羅はするつと俺と蘭丸の腕から手を離す。

するとそのままその上級生にダイブっ！

……後ろに倒れた。

すると、その後ろに南沢先輩がいるのが見えた。

あ、居たんだ。

「何気にひどいな、お前」

あ、心の声聞こえてたんだ。

すげっ！

「そいつは心の声、自分の悪口しか聞こえな　　グフウ」

涼輔と呼ばれた上級生の声が最後まで聞こえなかったのは、南沢先輩が腹を蹴ったからだ。

「うるさい黙れロリコン野郎」

「はー！？ それはお前も一緒だろー！！」

ヒートアップする涼輔さんと南沢先輩のケンカ。

それを止めに入る沙羅。

愉快そうに見てる蘭丸。

よく分からないまま立ち尽くす俺。

……何だこの構図は！？

「この金髪メガネ！！」

「変な髪形！！」

「何だと！！ 授業終わりに叫んだ馬鹿野郎！！」

「くウツ……」

あ、やっぱり叫んだの南沢先輩だったんだ。

なんかウケる。

「何だこの金持ち野郎！！……ってこれじゃ悪口じゃねえな」

「また心の声聞こえてたんですか。とりあえず何があったか知りま

せんが、ケンカやめてくださいよ。こんな廊下で」

俺の一言で二人の先輩は、お互い掴んでいた手を放した。

俺ってそんな説得力あること言っただけ？

「まあいい。とりあえず神童。お前俺のこと覚えてないだろ」

図星

俺キモい。

「たつくんさー、涼輔どころかアタシのことも覚えて無かったよ！
全くひどい奴だ。」

「お前ッ！」

俺は無意識のうちに沙羅の口を手で塞いだ。

「むがつ!?!」

ぶつと噴出す涼輔先輩。

「沙羅お前まだそんな風と呼んでんのかよ」
まだ腹を抱えて笑っている。

「まあいいや。それより覚えてないんだったら自己紹介と行きますか。俺は相川涼輔。まあ、3年。好きなことはサッカーとか。よろしく」

そう簡単に自己紹介をした涼輔先輩は、少し微笑んだ。
笑うとカッコよさが増すな。

「それよりさー、早く連れてってよ、部室！ せつかくサッカー部入ってあげるんだからさ！」

「上から目線やめろよ沙羅。神童連れてってくれなくなるかもしれないぜ？」

蘭丸が例の意地悪い笑みを浮かべ言う。

「分かったよ。とりあえず早く行こう！」
沙羅はまたも言う。

とりあえずそこにいた皆でサッカー部室に向かった。

サッカー部室に着いた。

早いわけじゃない。

作者が飛ばしたただけだ。

まあ、アタシはどうってこと無いけどね！

「部室とかってこつちに別にあるんだ」

いままで思っていたことを口にする。

「まあ、そうなんだ」

神童、言い方変えればおばさんぽくなるぞ。

そっだったんだみたいな意味で。

ウィーンと、ドアが開く。

「あ、キャプテン達！」

部室にいた一人、もとい天馬が言う。

「天馬だ！」

アタシは感情の無い声で言う。

「沙羅先輩！ 涼輔先輩！ ……ていうかそんな無感情な声で呼ばないでください」

お、天馬でも気づくんのだ。

当たり前か。人間なんだし。

「先輩たちがここに来たって事は、やっぱりサッカー部に入るんですか？」

「当たり前だ」

涼輔と声が合ってしまった。

まあいいけど。

「やった！ 沙羅先輩たちとサッカーできる！」

天馬は飛び上がらんばかりに喜んでる。

そんなにうれしいのか。

「んで、お前らはその人のこと知ってるみたいだけど、俺らは知らないんだから紹介しろよ」

褐色の肌をした、水色っぱい（？）髪の男子がイラついたように言う。

「分かったよって言うかもとよりそのつもりだったし。こつちの水色の髪のは足立沙羅っていつて、俺と同じクラスに転入してきた。それで、その沙羅の隣で南沢先輩とにらみ合ってるのは相川涼輔先輩。南沢先輩と同じクラスだそうです」

そう神童が説明し終わると、皆納得したというかなんというかって顔をした。

まあ、そうだろうな。

自分で言うのもなんだけど、こんな異様な二人組みがいるんだもん。そりゃあんな反応してもおかしくない……………と思う。

すると部室のドアが開く音がした。

振り返ってみるとそこにいたのは……

「なっ、沙羅！」

あ、先に言われちゃった。

まあいいか。

「どうしたんだ鬼道、知り合いか？」

「知り合いか、じゃ無いだろう！ 覚えてないのかこのアホ！」

「お前！ アホっていうな！ 変な髪形の癖に！」

「何だと！ このサッカー馬鹿！」

「うるさいシスコン！」

あれ、このパターンどこかで……？

「あー、もう二人ともやめて!!！」

二人の後ろにいた紺色のウェーブヘアの女性がケンカを止める。

「もう、なんでこんなところでケンカできるのか知りたいくらいよ

！ 子供の前でくだらないケンカしないで！」

「あ、ああ」

あ、このパターンどっかで見たことあると思ったら涼輔と南沢先輩のケンカと似てるんだ。

そんなのはどうでもいいや。

「それで鬼道。どこで見つけたんだっけコイツ」

あ、コイツ呼ばわりされてしまった。

別にいいけど。

「コイツ、この前天馬と一緒にいただろ。思い出せ」

「あ、そういやいたなあ」

すっごいのんきだな、おい。

「んで、それが何でここにいるんだよ」

「ちよっ！ それ呼ばわりとかひどっ！」

「まあ、いいじゃん。それより何でここにいるんだよ」

だめだ。どうやっても説得できるような相手じゃない。

「もちろん、サッカー部に入るためです！」

「俺もです！」

あ、涼輔忘れてた。

別に涼輔の影が薄いわけじゃないんだけど、周りの人の影が濃いか
らさ。

「おい、俺んとこ忘れてないよな。沙羅」

げっ、気付かれた。

「顔に出てるぜ」

くっそう蘭丸め……。

「何でサッカー部？」

田堂さん、質問の意味がわかりません。

どうやっても今の会話からその質問に繋がらないんですけど

「別にいいじゃないですか」

とりあえずそう答えておく。

「ふーん。お前らサッカー好きか？」

はっ？

意味がわからず目を白黒させる。

「おい、目が点になってるぞ」

蘭丸のやるっ、そんなことしつとるわ。

「三秒以内に答える。さーんにー……」

うわっやばい。

「「サッカー好きですー！」「」

涼輔ときれいにハモった。

「よし、なら良いや。それと、明日から一週間合宿行くぞ」

『はああああああああああああ!?!?』

アタシと涼輔どころか、この部屋にいる円堂以外の人物ほとんどが叫んだ。

「お前、今考えたわけじゃないだろうな?」

鬼道、ナイスツツコミ。

呼び捨てなのは放って置いてね。

「んなわけあるか。ただちよつと驚かそうと思ってただけ」

「俺に位は言えよ。いきなり過ぎるじゃないか」

「まあ良いじゃん」

「良くない。はあ、めんどくさい……」

お前ら、お笑いやればいいんじゃないの?とか思ったのは忘れよう。

「合宿、かあ……。しかも一週間……」

「転校二日目とか笑え……。ないか」

涼輔は驚きを通り越して呆れたように言う。

「でもさ、サッカー部の皆と仲良くなれるチャンスだぜ? 頑張れ」

何をだよ。

何を頑張るんだ。

いまいち何言ってたかわからん。

「ったく、やっぱ理解してねえんだろ。お前さ、友達つくんの苦手だったつつか苦手じゃん? だから、さ」

涼輔はちよつと笑いながら言った。

なんか、心配してないような言い方だな。

ま、いつか。

友達作り苦手なのは事実だし。

「まあ、そういうことになるけど、今日も練習始めるぞ!」

『はい!』

「……って、アタシたち放置かよ!」

「落ち着け。アイツはまあほつといて、お前ら初心者じゃないんだ

る？ ポジションは？」

「俺がMFで、沙羅はGK以外なら何でも大丈夫……だったよな？」

「え？ あ、うん」

いきなり話振られたんでびっくりしたけど、まあいいや。

「でも、まあやれっつていわれたらできるけど、ほとんどはFWです」

「そうか。まあ、これに着替える」

そういつてマネージャーらしき女子からユニフォームを受け取り、

アタシたちに差し出す。

「着替え終わったらグラウンドに来いよ」

アタシの手に無理やり押し付け、鬼道は去っていった。

「なんか、無愛想つつつか……。まあいいけど」

「それより早く着替えていこうぜ？」

涼輔は鬼道に会えて売れしそうだ。

余談だが、涼輔は鬼道にスツゲーマジで憧れてる。

……なんか、キモい。

「あ、あの……」

張りのある声が掛けられた。

「ん？ 何？」

アタシが振り向くとそこにいたのは青いショートヘアの女の子。

「ふ、二人ともここで着替えるんですか？」

遠慮がち、というより少し驚いたように言う。

「そうだけど？」

「ええ……」

女の子は何故か引いてるようだ。

「なんか、ダメ？」

「で、でも、男の人と一緒に着替えるんですか……？」

「あ、そういうことか。別にアタシは気になんないけど……」

「んじゃ、俺は行くぜ」

『早ッ！』

涼輔の早着替えは知ってたけど、なんかすごい早い。

「先行つてるぞ、沙羅」

そう言い残すと、涼輔はさっさと行ってしまった。

まあ、いいけどさ。

それでアタシも着替えてグラウンドに向かった。

「あ、そういえば名前言ってませんでしたね。わたしは空野葵って
います。よろしくおねがいます!」

さっきの青い髪の女の子が明るいい声で自己紹介をする。

すると連鎖したみたいにほかの人も自己紹介する。

まあ、普通か?

「アタシは瀬戸水鳥。んでコイツは山菜茜。とりあえずよろしくな
!」

「おっけー。よろしく!」

なんか、水鳥とは気が合いそうだな。

2話：異様な入部希望者（後書き）

ケンカシーンが多い気がする。

そして神童のキャラがどうしようもなくおかしい。

拓人「公式のキャラにしてくれよ……」

作者「却下」

蘭丸「おい、俺のキャラは意地悪じゃないんだが」

作者「知らん」

天馬「作者俺より年下の癖に何いばってんだよ」

……これやってるといろいろめんどくさいんでさよなら。

作者除く三人「強引に終わらすんじゃねえ!!」

3話・うるさい二人とバカなアイツ

「だから、嫌だつてば！」

アタシはクラスの子二人に詰め寄られていた。

「ねえ、お願い！ いや、お願いします！ 何でもするからあ！」

ああ、これだから女子は嫌なんだよ。って、アタシも女子か。

「おねがいだよあ」。私もつと神童と蘭丸に近づきたいんだよあ」

今のは青柳由維。

茶髪でショートヘア。青い瞳が輝く。

クラスのなかで一番背が高いとかそうじゃないとか。

「私もつ！ お願い、このとおり！」

そういつて手を合わせたのは如月ルナ。

きれいな黒髪で、こちらもショートヘア。

クラスで一番蘭丸と拓人が好きとか何とかで由維と張り合ってる。

「そんなのさあ、アタシに相談するよりサッカー部のマネージャー

になったほうが早くね？」

アタシはもう付き合ってられないというように言う。

すると、由維とルナは目を丸くしたようだった。

「そっか、それがいいや！」「そうだ、それがいい！」

二人そろって同じようなことを言う。

……もう、こんな奴ら放つところ。

さて、寝るかと思ったところ、時間を知らせるチャイム。

ちっ、と舌打ちをして、アタシは授業の準備を始めた。

「……ってことで、マネージャーやるって。こっちのルナは」

二人を紹介したところであんなこと言うんじゃないかと後悔した。二人がアタシにずっと質問してくるから、ウザイ。つまり、部活まで一緒だと質問をされる時間がすごい長くなるって事だ。

うう、めんどくさい。

「なあ、んじゃあ由維は……?」

神童がきよとんとしたようにたずねる。

「もちろん、入部希望です!」

ピースサインをグツと前に出す。

神童の顔すれすれのところに。

「わ、わかったよ。っーか、やっぱりもちろんなんだ……」

戸惑い気味の神童に、私はささやいた。

「由維とルナは、アンタのことが好きみたいだよ。良かったね、モテモテで」

「なっ……!」

神童は一呼吸おくとアタシをいきなり殴りつけた。

「い、痛いじゃないか!」

「バカ! お前が変なこと言うからだろ!」

「何だと……!」

今度はあたしが殴りかかるうとした時、また殴られた。

今度は後ろから。

「おい沙羅、お前最近おかしい。そんなすぐに頭に血上るなんてさそれは剣城だった。」

「んだよ剣城! 離せっ!」

いつの間にかアタシの手はつかまれ、自由を失っていた。

「へー、剣城とも知り合いなんだ。お前、ここの何人と知り合いだよ?」

子供の声ではない。

ふと振り返る。

「よっ、お前ら」

それは円堂だった。

あ、円堂で思い出したけど合宿はなんか急すぎるとか何とかで明日に変わった。

それでも急な気はするけど。

そんなことより。

「監督！ …… って呼ぶのは何かやだから円堂！」

「おいしいおいしい！ お前、呼び捨てやめろよ！」

「入部希望者とマネージャーやりたいてって奴がいます」

わめく円堂の次は神童。

「おい、アタシが言いたかったのに。まあいいや。えーと、入部希望つつうのはこっちの茶髪の青柳由維。んで、マネージャー希望つつうのはその隣の如月ルナ」

二人は居住まいをちよつとだけ正した。

ほんのちよつとね。

「ふーん、また女か……。まあいいや。由維、だっけ？ お前サッカ―好きか？」

「は？ あ、いや好きですけど？」

予想通り由維は一瞬驚いたようだったが、すぐ返事をする。

「よーし。なら今すぐ特訓するぞ！」

「の前にそっちのルナとかいうやつはどうすんだよ」

「あ、鬼道。んーマネージャーなんだから別に良いじゃん」

円堂軽すぎ。

何か、あたしの知ってる円堂じゃなくなってきた……。

ふとそのルナのほうを見ると、彼女は神童と蘭丸にすごい話しかけてた。

それを見る奴らも、蘭丸たちも引き気味。

まあ、あんなに話しかけられて引かないやつはいないだろ。

「よし、気を取り直して練習始めるぞ！」

『はい！』

あ、あたしも行かなくちゃ。

そう思つて皆の後を追いかけて……ようとしたところをルナに止められた。

「ねえ、神童君と霧野君取らないでよ。それさえ良ければ命の保障はするから」

「ちよつ、命の保障って……。」

「守んなかったら殺されるわけ？」

「まあ取るつてつたつてアタシあんま男に興味ないから。それより早く練習行かないと円堂に怒られるぜ？」

「う、うん……」

「お前ら遅いぞ！ 沙羅お前グラウンド十周！」

「うげつ、めんどくせえ……円堂一生呪つてやる……」

「ていうかこんなんでいちいち呪つてたらめんどくせえな。」

「そんなことを考えながらちよつと準備体操をして走りだした。」

「やっと終わった。」

「グラウンドが意外にも広いから練習する前に結構疲れた。」

「一休みしていると、円堂がこっちに来て話しかけてきた。」

「よし沙羅、終わったみたいだな。んじゃあ皆にペアになって練習しててつて言つといて。ちよつと俺用事思い出したから。んじゃ！」

「うわあ無責任。」

「ま、別にいいけどね。」

「アタシは立ち上がつてみんなの元へ走り出した。」

「あ、沙羅来た」

蘭丸が言ったから俺はちょっとそっちに気がそれた。
それが悪かった。

「痛ッ！！」

顔面にボールが飛んできた。

マジ痛い。

ボールが当たった衝撃で、後ろに倒れる。

「大丈夫ですか、キャプテン！ すみません……俺が今のボール蹴ったんです。ほんとにすみません……」

天馬が謝罪し始める。

今の、天馬のボールだったんだ。

アイツ、いつの間にあんなにキック力上がった……？

「おい皆……ってなんかあった？」

沙羅が何があったかわからないという顔で訊ねる。

「何でもないよ。それと、何か言おうとしてたみたいだけど何だったんだよ？」

説明する代わりにそう答えると、沙羅はため息をついて、

「円堂が『ちよつと俺用事思い出したからペアになって練習しててだつて』

と一息で言った。

「ふーん。んじゃ、しょうがない。二人一組でペアになって練習するしかないな」

沙羅から聞いた監督の指示を繰り返す。

「んじゃ、そういうことでそっちのやつらに言ってくるわ」

そう言うつと涼輔さんはちよつと離れたところにいる人たちに伝えるためそっちの方に行った。

「なあ、沙羅俺と組もう！」

「あ、霧野先輩ずるい！ 沙羅先輩！ 俺と練習しましょう！」
何か霧野と松風が沙羅の取り合いし始めた。

俺は誰と組もう、としばらく考えているとその間に沙羅の取り合いに南沢先輩と涼輔先輩も加わり、すごいことになった。

「あーもううるさい！ すこし黙れ！ アンタ達とは俺やらないし！」

沙羅の怒りが爆発したらしく、自分のことを「俺」と言っている。うわー、そういうやつだったんだ。

まあ、見た目と性格からしておかしくは無いけどね。

沙羅は一人でボーっとしてた浜野のところは何故か行って、

「アンタ相手いないんでしょ？ 一緒に練習しよう！」
といきなり言った。

浜野も浜野で、「別にいいよ」と笑顔で答えた。

すげえ。浜野すげえ。

沙羅が来たの気付いてもいなかったのにすぐ対応するとか。

俺はたぶん無理。

やつばすごいな……。

「なあ神童！ 由維と練習しよう！」

いきなり話しかけられた。

しかも後ろから。

振り向くとそこにいたのはさつき入部したばかりの青柳由維だった。

さつきも思ったとおり、俺はすぐに対応できなかった。

「お、俺？」

恐る恐る訊ねる。

「そう。神童拓人、あんたに言ってるの。一緒に練習しよう？」

「別に俺はかまわないけど……何で俺？」

思わず変なことを聞いてしまった。

だが由維は笑顔のまま答える。

「だって、雷門中のサッカー部のキャプテンと練習できたら、上手になれると思ったから」

「そっか」

そうか、「雷門中サッカー部のキャプテン」って、そんな風に見ら

れてるんだ。
何かプレッシャー。

沙羅は浜野のほうに行ってしまった。

仕方ない。神童と練習するか。

そう思っつて神童に声をかけようとする、神童は同じクラスの青柳由維と練習していた。

ちっ、しょうがない。他の奴を探るか。

誰かいないかなー、と周りを見ていたら、

「せーんばい！一緒に練習しましょう？」

……嫌な声が聞こえた。

声の主のほうを向く。

狩屋マサキ。

なんとなく気に入らない一年。

「……何で俺なんだ」

「えー、だつて先輩いじり甲斐があ……じゃ無かつた。先輩サツカ

ー上手いから」

確かに嫌な単語が聞こえた。

いじり甲斐がある？ふざけんな！

「……わかつた。一人でいるよりマシだ、早く練習するぞ」

本音を飲み込み、別の言葉を口にする。

狩屋は人の悪い笑みを浮かべた。

「そうこなくつちゃ。んじゃ、俺ボールとつて来ますんで」

「それは俺が行く。つていうかここにあるじゃないか」

「あ、本当だ」

舌打ちの音が聞こえたのは気のせいではないだろう。

「おい狩屋。練習する気無いんだつたらしくなくていいぞ。どうせボール取りに行くフリして逃げるつもりだつたんだろ？」

俺が言うと、狩屋はギクツとしたような顔をした。

が、すぐに平気そうな顔に戻った。

「気付いたならしょうがないですね。わかりました。練習始めましょうっ?」

その一言で、俺らは練習を始めた。

「はあ……沙羅先輩行っちゃったか……」

「おい、お前何してんだよ」

俺がぼーっとしていると、剣城が声をかけてきた。

「別に何もしてないけど……剣城は?」

「い、いやっ、べ、別に……あのさ、俺と一緒に練習しないか?」

自分から「一緒に練習しよう」なんて言わない剣城が、珍しくそんなこと言ったから、俺は聞いてみた。

「……それを言うために? ってか剣城なんで俺と……?」

すると剣城はちよつと照れて、

「そういう気分になったただけだ」と言った。

まあ、いいや。

「んじゃ、早く練習しよー」

「ああ」

「ねえ浜野。何でアンタってユニフォームの袖まくるわけ?」

「んー? なんとなく」

なんとなくってなんだよ。

まあ別にいいや。

「なー、俺も沙羅に質問して良い?」

「何？」

「沙羅つて一体サッカー部の何人と知り合い？」

う、それは言いたくない。

ていうか言うのめんどくさい。

そう思つて適当に断ると、「お前聞いてきたんだから答えるよ」と言つてきた。

マジめんどくせえ。

ま、別に聞かれて困りはしないからいいか。

「うーんと、神童と蘭丸と……ちよつと待て、ここ転入する前から知つてる人？」

「もちろん」

え、何人だろ。

「神童、蘭丸、天馬、剣城、円堂、鬼道……だから六人！」

「ふーん」

聞いてきたのに別に興味ないというような顔の浜野。

何だコイツ。

こんな意味分からん奴じゃなくて、おとなしそうな速水と組めばよかった。

ま、いまさら後悔しても遅いけど。

「ちゅーか寒い」

「だつたら何で袖まくつてるわけッ!？」

3話・うるさい二人とバカなアイツ（後書き）

どうも、サラです。

どーでもいいんですが、私と小説の沙羅とは無関係です。

あと最初のほうに出てきた青柳由維と如月ルナっていうのは自分のリア友です。

こんなウザク無いですけど。

あとなんかラブコメのラの字もないですね。

次話、やっと合宿に行きます！

4話・天馬の暴走（前書き）

一日で書き上げてしまった。

まあ別にいいんだけど、昨日と比べて短くなりました。

4話・天馬の暴走

君は、僕の手を取って笑う。

きれいな髪を風に揺らしながら。

それにつられて、僕も笑う。

君さえいれば、それだけで幸せだった。

僕は、そんな幸せな時間すら忘れていた。

寒い。とにかく寒い。

俺は一人で立っていた。

朝早くから、こんなに寒いのに。

「早いな神童。約束の時間まで一時間もあらず
後ろから声をかけられる。」

振り返るとそこにいたのは……。

「監督……脅かさないでくださいよ。というより監督が一時間早く
来いって言ったんでしょ？」

「はは、そうだったな。ところでお前、ほんとに沙羅のこと覚えてないのか？」

俺の言葉をさらっと受け流し、逆に質問してくる監督。

「覚えてないのかって言われても……実際覚えてないものは覚えてないですよ」

俺がそう言つと監督は「そうか」とだけ言った。

でも……。

「おーい神童！……って、監督も一緒でしたか」

「おー蘭丸か。さっきの言い方俺が居ちや悪いみたいに聞こえたんだが」

蘭丸はその問いに何でもないと回答する。

「そんなことないですよ。ただ監督は遅刻しそうなイメージがあったので、ちよつと意外だっただけです」

「それは逆に嫌だな」

苦笑いをする監督。

「それよりお前ら寒くないか？ 寒いんだったらキャラバン乗っていいぞ」

俺と蘭丸は顔を見合わせ、

「「じゃあ遠慮なく」」

と言った。

監督はまた苦笑いをした。

俺らはキャラバンに乗り込んで皆を待つことにした。

よし、一眠りするか。

「涼輔ー、置いてくよー?」

アタシは急かすように言う。

「待ってよ沙羅。ていうか自分の荷物くらい自分で持てよ!」
走りながら返事をする涼輔。

何で彼がアタシの荷物を持っているのかっていうと、今朝家を出る前に「ジャンケンで負けたほうが荷物を持つ」というのをやって、涼輔が負けたからっていうだけのこと。

けど何かかわいそうだったんでアタシは手伝うことにした。

「わかったよ。手伝うから早く行こう?」

「サンキュ」

荷物が減った涼輔はすこし安心したようだった。

「よし、じゃあ走るぞ!」

が、アタシがそう言うともた嫌そうな顔をした。

アタシはそれを無視して、走り出した。

アタシと涼輔が着いたころには、大体皆集まっていた。

「監督、まだ来てないのが浜野と多分それと一緒に行こうとしてた速水と沙羅……って、沙羅いつ来た」

着くなり神童にそう聞かれた。

「普通に今来たけど」

「あ、そう」

神童は素っ気ない返事をする。

「なあ、来てないの浜野と速水だけでいいのか?」

円堂が聞くと、

「あ、はい。その二人だけです」

神童が答えた。

「ねえ神童」

「何」

「眠い」

「んなこと知るか。あ、キャラバン乗ってて良いよ」

アタシの言葉に返事をし、ついでに付け足して言う神童。

アタシはわかったと答えてから、涼輔の手を引っ張ってキャラバンに向かった。

「おい速水！ 早く走れよ！ 遅れちまう！」

「誰のせいでこうなったと思ってるんですか！？ っていつか僕が本気出したら浜野君置いていきますよ！？」

ああ、走りながら喋るの疲れる。

ちゅーか速水足速いんだった。

忘れてた。

「ちゅーかそんなこといいから早く行こうぜ！」

「あーもうわかりましたよ！」

「あ、あれ浜野と速水じゃないか？」

蘭丸がアタシのほうをつつきながら言う。

くっそ、むかつく。

「蘭丸、それやめてくれない？」

「それって、沙羅のほっぺつつくの？」

首を立てに振る。

「えー、やだ。沙羅のほっぺぶにぶにして気持ち良いんだもん」

「やめろって言うてるんだから、やめてやれよ。嫌われるぞ？」

声の主は瀬戸水鳥。

なんか、天馬の応援をしてるとか聞いたけど、昨日の練習の時の見てたらそうっぽい気がしてきた。

ていうか声でかい。

耳痛くなっただし。

蘭丸は怒られている子供みたいにしゅんとしていた。

ざまあみる。

すると、

「ふー、間に合った」

「全然間に合ってますよ浜野君。三十分も遅れています」

浜野と速水がやっとな来た。

「よし、みんなそろったな。それじゃ、しゅっぱーっ！」

「しゅっぱーっ！」

円堂の掛け声が続いて、浜野も元気な声を出す。

ふう、やっとな出発できる。

どこかは知らないが、目的地に着くまでしりとりしよう！
……ということになった。

これは、狩屋と天馬が提案した。

といつてもほとんど天馬がやりたかったただけのようだが。

「キャプテン、「さ」ですよ！」

その本人、天馬が俺に話しかける。

「さ」かよ……。

さ……さ……。

「サッカー大好き松風天馬」

「ちよつ、それひどい！」

みんなが笑い出す。

俺も釣られて笑い出す。

天馬だけは拗ねてしまったようで笑わなかった。

「んじゃ俺は「ま」か……」

蘭丸はそういつて考え出す。

「どうしよう、思いつかない」

こういうときに限って思いつかないようで、唸りながら考える蘭丸

は、なんだかちよつとおかしかった。

「松風天馬じゃダメなのか？」

「人の名前はダメです」

狩屋は意地悪そうに笑う。

「じゃあ「松風天馬」に振り回される狩屋」

「先輩酷い！」

狩屋より天馬のほうがショックだったようで、余計落ち込んでしま
った。

「大丈夫か天馬？ 次は剣城だな」

俺は天馬を慰め……たのかはしらないが、剣城にまわす。

「お、俺も……？」

「そう。お前も」

剣城はあらかさまに嫌な顔をしたが、しょうがないといったように

考え出す。

「「や」か……。『やりたくないしりとりなんて』」

「何本音言ってるんだよ」

剣城の答えに対し、蘭丸は突っ込みを入れる。

「別にいいじゃん。次は誰？」

浜野が言つと、沙羅が「アタシ！」と言つて手をビシッと挙げる。

「うーんと、「て」だから……。『天然パーマ』！」

「誰が天然パーマだあああああ!!！」

天馬とは言つてないのに反応してきた。

「別にお前だとは言つてないんだが」

「そうですか！」

なだめようとしても怒りが治まらないようだ。

「ちゅーかまた「ま」かよ……」

「がんばれ速水！」

「ちよつ、次僕ですか？」

「そつ」

「うっ……」

速水はまだ何か言いたそうだったが、しぶしぶ引き下がった。

「『まだまだ怒る松風君』」

「ふっざけんなあああああああああああああああ!!！」

「みんな、これから天馬の名前入れないようにしよう?」

俺がそう言つと、みんな頷いた。

「なんか後ろが騒がしい気がするんだけど気のせいかな鬼道」

「俺に聞くな。でも騒がしいのは事実だと思うんだが」

「だよなあ」

俺はふう、と溜息をつく。

「ところで円堂。どこに向かっているんだ？」

鬼道はずっと気になってたんだけど、と言うように訊ねてきた。

「うーんと、まあ、着いたらわかるさ」

俺が曖昧に返事をしてごまかすと、鬼道は顔をしかめた。

まあ、別にいいよね。

4話・天馬の暴走（後書き）

今回合宿とかいったけど行く途中で終わってしまった。
まあ、次回にご期待を！w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8609x/>

俺の幼馴染は変わり果てていた イナズマイレブンGO

2011年12月11日19時51分発行